

第76回日本薬理学会年会

永澤悦伸*, 橋本敬太郎*

2003年3月24日から26日までの3日間、福岡県福岡市の福岡国際会議場、福岡サンパレス、マリンメッセ福岡の3会場にて、第76回日本薬理学会年会（会長：九州大学大学院医学研究院、伊東祐之先生）が開催された。

メイン会場であった福岡国際会議場は、2003年3月にオープンしたばかりの新しい施設で、数千人規模の学会が開催されるのは、3月中旬に開催された第43回日本呼吸器学会に続き、この薬理学会が2番目であったと思われる。同会場では、薬理学会の会期終了後、第67回日本循環器学会学術集会、第26回日本医学会総会と日本を代表する大規模な学会が続けて開催された。同会場は、博多湾を望む眺望の良いベイエリアにありながら博多駅からバスで十数分の距離で、バスの本数も多かったことから交通の便が非常に良い印象を受けた。福岡空港も市街地に近接しており、地方からも参加しやすい環境であった。今後、同会場での学会開催も増えてくるとと思われる。

第76回日本薬理学会年会の最大の特徴としては、第80回日本生理学会大会（当番幹事：福岡大学医学部、今永一成先生、河田 溥先生）との同時開催が挙げられるだろう。プログラム集の巻頭言に年会会長と大会当番幹事の3名の先生が「生理学と薬理学とは、これまで研究方法、内容において相互補完しながら発展してきたこと、両学会のさらなる交流、発展、活性化の必要性に鑑み、両学会学術集会を同時開催といたしました」と、同時開催の意義を述べられている。実際に、薬理学と生理学で研究内容を明確に線引きすることは難しく、また薬理学会と生理学会の両方に所属されている研究者も多いことから、会員にとって同

時開催の意義と利点は非常に大きいと思われた。単なる同時開催ではなく、プログラムの面でも薬理学会、生理学会共同企画のシンポジウムが「QOL」をメインテーマに企画されるなど随所で工夫されており、薬理学と生理学の両方の視点からディスカッションが繰り広げられていた。すばらしいと感じたのは、参加受付は所属学会ごとで行われていたが、どちらの学会を通じて参加しても、シンポジウムを始めとする両学会のすべてのプログラムを聞くことができた点である。このシステムによって、一般ポスター会場や一般口演会場などで、薬理学者と生理学者が膝を交えてディスカッションする姿があちらこちらで見受けられ、まさに同時開催の利点が存分に発揮されていたように思う。

さて、内容に目を転じてみると、ノーベル賞受賞者の Paul Greengard 博士の特別講演を始め、現在の薬理学、生理学の研究の先端を進んでいらっしゃる先生の特別講演やシンポジウムが目白押しで、濃密なプログラムであった。その中で、個人

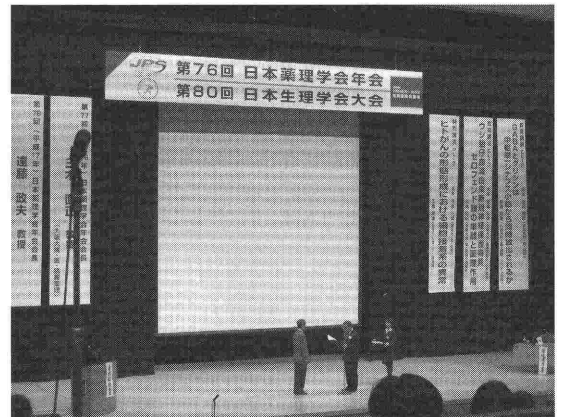


Fig 1 会場風景 (福岡国際会議場)。

*山梨大学大学院医学工学総合研究部薬理学

的に興味深かったシンポジウムを挙げてみると、企画教育委員会主催の薬理学教育に関するシンポジウムがある。学会という場で教育についてディスカッションするという機会は少ないと思われる。現在、薬理学が教えられているのは、医学部、歯学部、薬学部、看護学部などであるが、どの学部にも共通しているのは、教える時間不足と教えるべき内容の多さである。医学部で学生時代に学習すべき内容の量は、この十年間で十数倍にも増えていることは周知の通りであるが、そのことは他の学部でも同様で、いかに限られた時間で必要十分な内容を教えるかというのは、教育上一番の課題である。そこで導入が検討されているのがコアカリキュラムである。シンポジウムでは、現在の教育内容とモデルコアカリキュラムの現状について、各学部代表の先生の発表が行われた。ディスカッションにおいては、イギリスの薬理学会における教育活動について、Ian Hughes 博士がコメントされていた。教育についての問題は、薬理学に限った話ではなく、臨床医学でも問題が山積していると思われるので、今後、他の学会でも卒前教育についてディスカッションできる機会が増えることを望む。

循環器関連の発表では、ATP 感受性カリウムチャンネルとナトリウム・カルシウム交換輸送体の

機能と薬物による機能修飾についての話題が興味深かった。Cardiac Arrhythmia Suppression Trial (CAST) の報告以降、ナトリウムチャンネル阻害薬に取って代わる抗不整脈薬の模索が行われているが、今回のシンポジウムで取り上げられた ATP 感受性カリウムチャンネルとナトリウム・カルシウム交換輸送体は、特にその有効性が期待されている薬物標的である。前者については、臨床の現場ですでにその心保護効果が示されているし、後者についても動物実験の結果が相次いで報告されている。ATP 感受性カリウムチャンネルは、同チャンネル開口薬であるニコランジルの大規模臨床試験の結果が発表され臨床的にもトピックとなっている薬物標的であるが、シンポジウムでは、同チャンネルに関連した動物疾患モデル開発やプレコンディショニング、心保護効果における役割について発表された。同チャンネルは、日本がその発見やその後の機能解明に大きく寄与してきたことで、今回発表された内容も、世界とトップレベルの競争を繰り広げている内容であった。一方、ナトリウム・カルシウム交換輸送体に関するシンポジウムでは、同輸送体におけるナトリウムとカルシウムの交換比率が 3 : 1 なのか 4 : 1 なのかについてのホットなディスカッションや、最近相次いで開発された同輸送体のノックアウトマウスや輸送体阻害薬による同輸送体の機能解析の結果などが報告された。この輸送体に関する研究も、機能解析や阻害薬開発の点で日本の研究が世界をリードしている分野であり、今後の進展が楽しみである。

薬理学会年会事務局を担当された井上隆司先生に今回の学会参加者数をお伺いしたところ、薬理学会参加者 2552 名、薬理学会総発表演題数 1129 演題、生理学会大会参加者 1736 名、生理学会総演題数 921 演題、以上両学会合わせて総参加者数 4288 名、2050 演題とのことで、例年の薬理学会年会の参加者が二千数百人であることから、単純に考えれば倍近くの人と交流でき、様々な研究に触れることができたことになる。おそらく、今回のプログラム作成に当たっては、主催者の皆様には単独開催時に比べ倍以上のご苦勞があったことと思われる。そのご苦勞に対して、敬意を表したい。

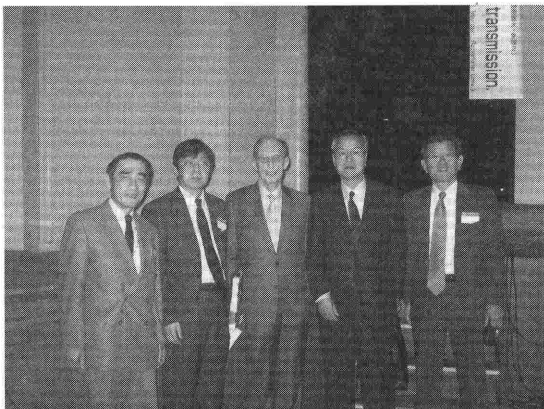


Fig 2 ノーベル賞受賞者 Paul Greengard 博士を囲んで。
(左より伊東先生、河田先生、Greengard 博士、大槻先生、橋本)